

小規模校における ICT 利活用実践

活動の概要

本校は、全校生 68 名の小規模校で、全学年が 10 名前後の単学級である。特別教室棟の視聴覚教室には児童用 12 台のデスクトップパソコンがあり、4 年生（15 名）以外の学年は、1 人 1 台ずつ利用できる環境が整っている。さらに、町教委から派遣される「情報教育指導補助員」が、一学期に 1 回（2 時間）は各クラスに入ることができ、担任との同室複数指導にあたることができる。

小規模校ならではのきめ細やかな指導を活かした取り組みを、パソコン（情報）教育の中で発揮できないだろうか、年度当初に各学年の目標を設定して、全学年で取り組んでいる。

学年	各 学 年 の 指 導 の め や す
1	パソコンの電源 ON/OFF ができる。マウスを使って必要なクリックができる。 〔お絵描きソフト、一太郎マウスレッスンなど〕
2	文字入力ができる。マウスを使って、必要な右クリックができる。 〔一太郎・ワード、パワーポイントなど〕
3	キーボードによる直接文字入力ができる。FD やフォルダなどに保存することができる。マウスを使って、ドラッグができる。 〔算数ランチボックス、各種 CD 図鑑など〕
4	ローマ字入力ができる。インターネットで HP の閲覧ができる。ネチケットについて理解する。 パソコンによるコミュニケーションが図れる。 〔エクスプローラ、ハイパーネットキューブなど〕
5	ネット検索で必要な情報を取り出すことができる。作文などの長文をワープロで入力できる。 〔エクスプローラ、一太郎・ワード、パワーポイントなど〕
6	情報発信活動ができる。プレゼンテーションソフトが活用できる。 〔エクスプローラ、一太郎・ワード、パワーポイント〕

担任により、コンピュータ教室の使用頻度に多少の違いはあるが、児童が次の学年に上がったときに戸惑わないよう、めやすとして設けている。このめやすは上限ではないので、児童の実態に応じてさらに発展した課題に取り組めることにしている。1 人 1 台ずつ使える環境が、個人の興味関心に即した利用を可能にしている。教師との 1 対 1 でのやりとりや、時には手本になるような作品をモニターで他の児童に紹介する等おこなっている。そんな発展課題に取り組む時には、前述した情報教育指導補助員と同室複数指導することで、できるだけ早くそして細かく児童の『困った！』に対応している。

本校では、全児童に MO(640MB)を 1 枚ずつ配布している。管理は担任が行い、普段はコンピュータ準備室に保管している。現在は MO より CD や DVD の方が普及して一般家庭でも使われることが多いが、まだ次世代メディアが確立する前から、猪名川町立の小中学校に導入されたパソコンには MO がセットアップされていたことから、今でも MO を多用している。この MO が 1 枚あれば、かなりの作品が保存できる。ワードや一太郎で作ったテキストだけでなく、デジカメ写真やお絵描きソフトで作ったオリジナル作品も個人の MO に保存ができ、ハードディスクに残さなくていい。誤って自分以外の方が消してしまうこともなく、高学年では著作権の学習の導入にも利用できる。担任が替わっても児童の作品は残り、卒業前にはその MO から CD を焼いて渡すこともできる。低学年で書いた日記などを高学年で読み直してみるなど、成長の足跡がデジタル化され、劣化なく残されている。

ICT活用事例（1年生の実践）

今年の1年生は、紙に書いた日記や、感想文を時々MOに入れている。1年生の能力としては、少し背伸びしたことをしているのだが、児童は興味をもって取り組んでいる。ローマ字はまだ習っていないので、ひらがな入力をほとんど指1本ずつで文字打ちするのだが、慣れてくるとなかなか速い。ローマ字入力に慣れた教師より速く文字を探し出す。

できた作文をプリントアウトして自分で読み直してみる。促音や拗音の間違いに気付く。鉛筆を握って一生懸命書いている時には見つけられなかった誤りが、活字となって出てきたものであれば見えてくる。パソコンを使うことで、自分の作文と距離を置くことができるようだ。もちろん、できあがった印刷物はオリジナルなので愛着を持ち、それでいてどこか印刷物としての重々しさもある。何よりそれを作ったのは自分だという自負と達成感がある。手書きの味はないが、また書きたいという意欲がわいてくる。たくさん書いたつもりだったのに印刷して短かったら、次はもっと長く書こうという気持ちにもなる。長ければいいというわけではないが、長く書こうとすれば、それだけ題材と向き合うことになる。1年生が手書きできるマス目は大きく漢字も少ない。だから、見た目では「多く」でも原稿用紙に漢字交じりで書くと「目減り」するのである。この錯覚は他者との比較ではなく、自分の中での比較であり、そのことが意欲として次につながっているように思える。パソコン＝ゲームと思っている児童もゲーム感覚を捨てきれないながらも、この利用法を気に入っている。

他の時間には、CD 図鑑を見たり、ゲーム感覚の算数ソフトをしたりもするので、パソコンの楽しさや利便さを実感している。パソコンに対する恐怖心や警戒心のようなものは感じられない。まずは触れてみることの必要性を実感している。



作文を入力する1年生



情報教育指導補助員による支援

成果と課題

担任によって、パソコンに触れるチャンスが大きく変動するのは児童にとって良いこととは言えない。児童はパソコンに対して関心が強い場合が多い。そのため、誰が担任になっても、パソコンを使うことができる技量を身につけておく必要があるだろう。児童は、低学年からできる限り触れ親しむ機会をとることで、パソコンを抵抗なく使用できるようになると考えられる。

本校では、特別支援教育の研修（プレゼン）にも、本来のパソコン研修以外にも活用し、教師もパソコンに慣れるようにしている。むしろ教師の方が抵抗が強いので、コンピュータ教室に足を運ぶ回数を多くし、デジカメの活用を増やす等、関心を高めている。



校内研修の様子